
二匹のウサギと虹のカケラ

がう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二匹のウサギと虹のカケラ

【Nコード】

N9390F

【作者名】

がう

【あらすじ】

白いウサギと黒いウサギのお話
白いウサギの病気を治すために黒いウサギが一生懸命森の奥に向かいます。

深い森の中にポツカリと開いた
原っぱ

右と左に一本ずつのモミの木
木の下には一匹ずつ

ウサギが住んでいました。

右の木の下には真っ白なウサギ

左のきの下には真っ黒なウサギ

二匹のウサギはとっても仲良し

遊ぶ時も一緒

ご飯も一緒に半分こ

白いウサギは黒いウサギが大好きです。

黒いウサギも白いウサギが大好きです。

毎朝一緒、今までもこれからも二匹ともそう思っていました。

そんなある日の朝

暖かいお日様の光で目を醒ました黒いウサギは何時もの様に

白いウサギを呼びに行きました。

しかし白いウサギは木の下から出てきません。

「しろちゃん、しろちゃん」

暫くすると小さな声で白いウサギは言いました。

「くろちゃん、ごめんね。なんだか身体が重くて苦しいんだ。今日

は一緒に遊べないみたい」

白いウサギは悲しそうに言いました。

「しろちゃん、元気出して。きっと直ぐに元気になるよ」

黒いウサギの励ます言葉に

小さく頷くと丸くなってしまいました。

黒いウサギは考えました。

考えて、考えて

どうしたら白いウサギが元気になるか考えました。
そして思い出しました。

まだ、小さい子ウサギだった頃
お母さんと一緒だった頃
教えてもらったお話を

「森を奥へ、奥へずーっと奥へ行くと虹の根っこがあるんだよ。そこは虹がカケラになっていっぱい降り注いでるのよ。そのカケラを食べればどんな病気だって吹き飛んでしまうのよ。」

黒いウサギは決めました。

元気な白いウサギになってもらう為に

ぴよんぴよん、ぴよんぴよん

森の奥へ、奥へ

ぴよんぴよん、ぴよんぴよん

森の奥は木々が重なり

暗くて昼間なのか、夜なのか解りません。

それでも黒いウサギは虹の根本を目指して一生懸命走ります。

ぴよんぴよん、ぴよんぴよん

そんな黒いウサギの前に一匹の狐が飛び出しました。

「おっと、おちびちゃん 此処は通す訳にはいかないよ。俺は腹が減ってんだ、お前を喰ってやるからそこを動くんじゃねえ」

狐は舌なめずりをしながら今にも飛び掛かって来そうです。

黒いウサギは言いました。

「狐さん、僕はどうしても虹の根っこに行かなくちゃならないんだ。大切な友達に虹のカケラを食べさせたら必ず戻ってきます。

その時は僕を食べてくれたって構わないから此処を通してください。

「

狐は少し考えると言いました。

「そんな事言っただけで逃げんならう

俺は今、腹が減ってるんだ。

どうしても行くと云うなら俺もついて行くぞ、その代わりに・・・」

というなり黒いウサギの長い耳にかみつきました。

黒いウサギは痛くて、痛くて

沢山、沢山涙がこぼれました。

それでも黒いウサギは走り出しました。

ぴよんぴよん、ぴよんぴよん

後ろから狐もたったか、たったか付いてきます。

森の奥へ、奥へ

ぴよんぴよん、ぴよんぴよん

たったか、たったか

そんな二匹の前に大きな身体の狼が藪から飛び出しました。

「そのウサギに狐、俺は今腹が減ってしょうがないんだ。大人しく喰われるがいい」

真っ赤な口からよだれを垂らしながら舌なめずりをして言いました。

狐はブルブル震えながら

「このウサギをお食べ下さい。」

私は骨ばっかりで食べても美味しくありません。ましてや骨が刺さって貴方が怪我をなされてしまいます。どうかお許しを」

狐はそれだけ言うとも一目散に逃げ出しました。

狼はフンと鼻を鳴らすと

あっというまに狐を追いかけガブリと噛み付くとまたたくまに食べてしまいました。

ゆっくりと戻ってきた狼は驚きました。

てっきり逃げ出していると思った黒いウサギは微動だにする事なくそこに居たのです。

その目はただ真っすぐに

森の奥に向けられています。「何故、逃げ出さなかった？逃げようと思えば逃げることも、隠れることも、先に進む事だって出来ただろう？」

狼の言葉に黒いウサギは言いました。

「僕はどうしても虹の根っこに行かなくちゃならないんだ。だから逃げる事は出来ないよ。それに、逃げたって追いつかれちゃえばあの狐とおなじ様に追いつかれて食べられちゃうと思ったんだ。」
狼はますます不思議そうに言いました。

「だが、逃げ出さなければそのまま俺に食われてしまうかもしれないだぞ？それなのに何故だ？」

黒いウサギは震える事もなく真っ直ぐに狼を見つめると言いました。

「僕が逃げなかったのはお願いするためだよ。」

「お願い？狼である俺に？今まさに食われてしまうかも知れないというのに面白い奴だな。聞いてやるから言ってみろ」

黒いウサギは言いました。

「僕を食べるならそれでも良いよ。だけど、もし食べるなら大切な友達に虹のカケラを届けてからにしてほしいのです。その後でなら食べられたって構わない。だからお願いします、此処を通してください。」

狼は目を閉じて少し考えると言いました。

けど、もし食べるなら大切な友達に虹のカケラを届けてからにしてほしいのです。その後でなら食べられたって構わない。だからお願いします、此処を通してください。」

狼は目を閉じて少し考えると言いました。

「お前の小さい身体を食べたってたいして腹の足しにならんだろうよ。此処を通してやるよ、たがこのまま行かせたら狼の誇りに関わる。だから・・・」

と言うなりガブリとウサギの大きな耳に噛み付きました。狼はそのまま耳をかみちぎると

黒いウサギを振り返ると

「もしお前が逃げたり先へ進んでいたら俺は迷わず追いかけてその身体をひと飲みにしていただろう」

そう言うのと暗い森の奥へゆっくり消えて行きました。

黒いウサギは両方の耳を無くしてしまいました。
痛くて痛くて涙が止まりません。

それでも黒いウサギは走り出します。

白いウサギの為に

ぴよんぴよんぴよんぴよん

突然、森が無くなり

辺り一面がキラキラと光り輝いています。

全ての物が虹色に光り

辺りは眩しいぐらいです。

「此処が虹の根本？」

黒いウサギが呟くと

驚くことに返事が返ってきました。

「そのとおりじゃよ、お前さん何しにきなすった？」

黒いウサギが声のする方に目をこらすと

そこには一人の小人がショベルを使って虹色に輝く草や小石、木々の枝や葉っぱを虹に向かって投げ込んでいました。

虹は投げ込まれる度にキラキラと輝きます。

そして空目掛けてぐうーんと

伸びていきます。

「小人さん、僕はどうしても虹のカケラを持って帰りたいんだ。大切な友達の病気を治してあげたい。お願いします、虹のカケラを分けてください。」

小人はシャベルの手を止めると

「ここに有る全ての物が虹のカケラだよ。草も木も石ころも。好きなだけ持って帰るといい」

ニッコリと笑い小人はまた忙しそうにシャベルを動かしました。

「ありがとうございます、本当にありがとうございます」

黒いウサギは虹色に輝く四つ葉のクローバーを一つ口にくわえ
もと来た道を一生懸命走り出しました。

ぴよんぴよん、ぴよんぴよん

森を抜けて友達の所を目指して

ぴよんぴよん、ぴよんぴよん

そして、とうとう友達の待つ

木に帰って来ました。黒いウサギは木の下に有る白いウサギの巣へ飛び込みました。

「しろちゃん、しろちゃん　コレさえたべれば直ぐに元気になるよ。」

白いウサギはユツクリ目を開けるとそこには虹色に光る四つ葉のクローバーをくわえた黒いウサギが居ました。でも、耳を両方ともちぎられて痛々しい姿で

見慣れた友達の姿はもうありません。

「くろちゃん、私のためにそんな姿になっちゃったの？ゴメンなさい。ゴメンなさい」

白いウサギは涙がポロポロこぼれました。

黒いウサギはニツコリ笑いながら言いました。

「しろちゃんが元気になるためなら平気だよ。さあ、早く食べて。」

白いウサギは首をふるふると振りました。

「私だけで食べるなんて出来ないよ。半分こしよ」

白いウサギはニツコリ笑って言いました。

「しろちゃん・・・うん、そうだね半分こしよう。」

虹色に光る四つ葉のクローバーを食べた白いウサギは一瞬ぽあっと光ると白い身体が虹色に染まりました。「なんだか身体が軽くなつてさっきまでのつらさが嘘だったみたいだよ。くろちゃんも食べてみて」

白いウサギの病気はすっかり良くなって黒いウサギの周りをぴよんぴよん跳ねて回りました。

黒いウサギも半分になった虹色の葉っぱを食べました。

すると黒いウサギの身体もぴかっと一瞬光ると不思議な事に

食べられてしまった両方の耳の代わりに小さな虹がピョコンと生えてきました。

「くろちゃん、くろちゃん、頭に虹が生えてきたよ。虹のお耳だよ。」

白いウサギは嬉しそうに黒いウサギの周りをぴよんぴよん、グルグル回りました。

「僕はしろちゃんが元気になった事だけで十分嬉しいよ。」

黒いウサギもぴよんぴよんグルグルと白いウサギの周りを回りました。

「これからもずっと、ずっと一緒だねしろちゃん。」

「これからもずっとずっと一緒だねくろちゃん。」

二匹のウサギは幸せそうに寄り添ったままぴよんぴよん跳ね回りました。

二匹の跳ねた後には小さな虹が残り原っぱを虹色に染め上げます。

静かな森の二匹のお話

ぴよんぴよん、ぴよんぴよん

二匹はいつまでも一緒に

幸せに過ごしました。

(後書き)

基本的に童話書きです。文章力足りません。改行微妙なので読みづらい等課題はいっぱいありますが徐々に手直し出来たらしめていきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9390f/>

二匹のウサギと虹のカケラ

2010年10月16日23時17分発行